

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 谷口康浩著『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 昭典, Abe, Akinori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000371

谷口康浩著

『縄文時代の社会複雑化と

儀礼祭祀』

阿部昭典

本書は、谷口康浩氏にとって『環状集落と縄文社会構造』(学生社、二〇〇五年)『縄文文化起源論の再構築』(同成社、二〇一一年)に次いで三冊目の単著にあたり、縄文時代の社会組織について儀礼祭祀という視点から読み解いたものである。

第Ⅰ部では、学説史と理論の整理で谷口氏の研究視点が明示される。第Ⅰ章では本書のテーマとなる縄文時代後半期における社会の複雑化、生産と経済の特殊化、儀礼祭祀の発達の三要素も相互作用をもちながら歴史を動かす原動力であると評価し、これらを考察する必要性を説く。さらに「物質文化」と「精神文化」の二分法や研究の専門化・細別化による総合的・通史的視点の希薄さを批判している。また従来までの「呪術社会論」

への否定的見解を示し、考古学における儀礼祭祀の研究視点を三つの次元に区分し、著者はアウトサイドからの意味の説明の立場をとる。第2章では縄文社会研究史を整理し、「原始共同体論」や「不平等・階層化社会論」について見解を述べて、第3章では親族集団の組織原理となる出自とそれに結びつく儀礼祭祀が社会の分節化・階層化を促進する原理的要因になりえることを説明する。

第Ⅱ部「縄文時代の親族組織と儀礼祭祀」では、親族組織と祖先祭祀に関わる諸問題について考察し、第4章では中期環状墓群の分節構造の分析から出自集団を論じる。第5章では、モニュメントの築造行為が盛行していく過程を通時的に検討し、儀礼祭祀を司る家屋や人物の登場など社会の複雑化・階層化の進展を読み取る。第6章では、大形石棒が家屋や葬制と密接に関わり、祖先祭祀の発達を示す歴史的現象であると評する。第7章では、竪穴家屋における空間分節やシンボリズムに着目し、中期末における社会変動に対応して、イデオロギーの強化・再編が起ったと結論づける。第8章では、再葬制について他界観・祖霊観の体系化を前提とする通過儀礼として捉え、「死と再生の観念」が思想的背景にあることを指摘する。

第Ⅲ部「先史時代の社会複雑化」では、ブリテン新石器文化

との比較から、先史時代の社会複雑化に認められる特質を論じる。第9章では、縄文文化との比較から、集団墓造営や葬制と密接に結びついたモニュメント築造という社会的行為に本質的共通性があることを指摘する。第10章では、縄文時代後半期における社会複雑化の要因を「社会制度」と「経済」の両側面から考察し、儀礼祭祀の発達、生産の特殊化や遠距離交易の発達を促し、弥生時代での稲作の能動的受容につながるとみる。第11章では、これまでの議論をまとめて、縄文時代後半期に生じた社会・文化の質的变化を総合的に解釈する。

本書は、谷口氏のこれまでの環状集落構造論、大形石棒プロジェクト、景観考古学の視点、英国研究留学での経験を踏まえて執筆されたものであり、グローバル・ヒストリーの観点からの先史時代の枠組みの再構築が念頭にあるものと推察される。このことから、今後の先史社会研究の道標になる必携の書であると言えるだろう。

(A5判、三三〇頁、同成社、二〇一七年三月発行、定価六五〇〇円＋税)